
太陽の罪と罰

伊月りさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

太陽の罪と罰

【Nコード】

N8960A

【作者名】

伊月りさ

【あらすじ】

罪悪感の行方を追ったら、どこに辿りつくんだろう。それが、生きること？

罰

「おまえの目に映れば、黒は白になるんだろう？」

スズメはぼくのその目を覗き込んだ。茶色いビー玉みたいな眼球が、ぼくのそれにひつつきそうになって、思わず後ずさりした。

「いやだ、なんで」

塗装がはげた壁に、背骨がこすれて痛い。

「追い詰めた」

距離が縮まる。後ずさりは限界。

「いやだ」

スズメの真つ赤な唇が、綺麗な弧を描く。慌てながらもぼくはいつもみたいに、ちゃんと見惚れた。

額が触れる。夏に煽られてのぼせた体は、すぐにばれてしまった。どうしていつもこうなるんだろう。

くらくらする頭で考える。これもいつもとおんなじだ。どうしていつもスズメはこんなことをするんだろう。どうしていつもぼくはこんなことをされるんだろう。どうしていつもぼくは、こうなってしまうた理由を考えるんだろう。

そしていつも辿りつけない。

痛い、とつぶやくのも許されないほどに、スズメは額を押し付ける。後頭部がコンクリートに押し付けられて、頭にひびが入ってしまいそうだった。

「目をつぶるな、ばか」

しゃべると、二人の唇が触れた。ぼくは仕方なく目を開ける。目の前には、スズメの目に映るぼくの目。ぼくの目にはスズメの目が映っている。

磨かれた硝子のようなその視線を、渦巻きのようなぼくの目が吸い込んでいく。

「混ざろうとは思わないの、」

それならばすぐにできるよ。と、言い切らないうちに足の甲に痛みを感じた。スズメが踏んずけたのだ。

「おまえは、おれの気持ちをわかれよ」

スズメの眼光はぼくを放さない。

ぬるい風が目を乾かしても、まばたきができなかった。

罰

ひとを殺してしまったよ。

聞いてもタカノは、逃げる、とは言わなかった。スズメの一言に、顔も向けずに頷いただけだった。

暑さは己を解放的にするんだ。

だから、仕方ないっていうのか。

そういうことにしておけばいい。

「だからまあ、座れよ」

空調の弱いカフェは、簡易サウナのようだ。虫すら集らない温度。タカノは今日も、呼吸をするようにコップを磨いている。

「スズメは、どうしたいんだよ」

「いま考える」

左手のひらを開いて眺める。ひとの血は乾くとこんな色になるのか、と思った。

「心臓は？」

タカノは、はあ、と硝子のコップに息を吹きかける。スズメは左胸をおさえた。

「ふつう」

「ざんねんだ」

キュツキュ。そのまま続けたらコップに穴が開いてしまうのではないかというくらい、こする。何を拭きたいのかなんて、タカノ自身も、もうわからない。

板張りのくすんだ床が、いつもよりも暗く見える。そんな気がする。

そう言ったら、タカノは驚いてくれるだろうか。

頭の真上でまわるシーリングファンから、生ぬるい風が肩におりる。汗はかいていなかった。寒気もしなかった。ただぼうつとするのは、蒸し暑さのせいなのか。

「雨だな」

タカノの声を合図にしたかのように、壁越しに弾んだ雨音が聞こえてきた。

「どうりで、蒸してたわけだ」

コップを磨く手は一秒も止まらない。

同じ硝子ならあれを磨けばいいのに、と思うくらい汚れて霞みがかった窓ガラスに、雨粒が跳ね返る。水を見てもちっとも涼しげに感じない。これが夏の雨の特徴なのだろう。

「全部、洗い流してくればいいのに、って？」

「え」

タカノは顔もあげずに語りかけた。

「お前の心を代弁してみただけだ。スズメがそんな安っぽいせりふを使うべきじゃないと思うけどな」

なんでも、お見通しかよ。だからお前に話すのはイヤだったんだ。と思いながら、唯一自分の心を知ってくれるタカノの存在を否定するのは恐ろしかった。

見透かされることは、楽なのだ。とても。

「しばらくそうして唸ってればいいさ。お前は結局そうするしかないだろう」

スズメには一瞥もくれない。同じコップを何度も回転させる。そんなに自分の指紋が気になるなら、手袋でもして磨けばいいのに。そういう思いだけはなぜか、タカノは無視する。

「最終手段は？」

スズメの問いに、タカノは初めて手を止めた。

雨音が入り込む。

スズメの気持ちを読み取ろうとするタカノが、静けさを生む。しばらくして、ため息をついた。諦めと、呆れのため息。

「また、それが」

なんでも、お見通しってわけだ。

ずるいと思えば思うほど、タカノはそれを隠そうとする。

罪

「夏休みなのに学校に行くなんて、おにいちゃんは本当にかわいそう」

サラは玄関で学校指定の運動靴を履くぼくを見て、言った。

そのゆるりとした女の子らしい声で言われると、本当に情けない気持ちになる。

行ってきます、と誰に言うでもなくつぶやいた。ドアを開けると左手の壁に、洗い立てのサラの運動靴が乾かしてある。ぼくはきつと今日の補講を終えてから、自分のを洗うことになるだろう。

雨上がりの匂いがする。カタツムリとあじさいと虹がよく似合う匂い。

どうせこの靴はすぐ洗うのだ、と思うと、水たまりにわざわざ入ってみたくなったりする。今日は特別だ。

学校までは歩いて二十分ほどだ。雨の余韻を満喫するにはぴった

り。
見渡すと、舗装された道路脇に不自然なほどたくさんの木々が、時折きらきらと輝きながら並んでいる。緑を透かして届く光、生温い風の匂い。深呼吸をしたくなる。

空を仰いだ。無駄なものをすべて水滴にして捨て去った後の、青い空。太陽光の反射に思わず目をつむる。閉じながら、瞳がオレンジ色に変わるのがじんわりとわかった。

ぼくの眼は太陽を受けると色を変える。黒目がゆつくりと橙色になつていくその事実を覚えてくれたのは、唯一生まれたときからのぼくを知るサラだった。双子でも二卵性だから、サラの眼はえてして普通の眼である。

おにいちゃんは太陽の子どもなんだよ。だから、あたしも太陽の子どもなの。

だから寂しくなんかない、と、親の不在に理由づけたりする。ぼ

くはずいぶんサラに救われてきたと思う。

だから、この瞳は大切にしている。

ふたりと世界の均衡を保つために、不可欠だからだ。

「帽子をかぶってくればよかったな」

贅沢なほど陽の光を受けながら、それでもぼくはこのオレンジを
他人にはあまり見せたくない。

きれいだと言ってくれるのは、サラだけでいい。

罰

自分でも罪だと思っていない罪を拭うためにはどうすればいいのか。

いや待てよ、自分で罪だと思っていないのなら、拭う必要がないんじゃないか。タカノに言われたから気にしているだけなのじゃないか。

それでも、気になるということは、ちょっとは罪の意識があるということか。

そもそも、罪の意識とはなんだろう。

「わかんないよ?」

気づくと、タカノがカウンターを挟んで目の前に座っていた。そしてもう一度、「わかんないよ、って?」と言った。

「また、おれの気持ちを代弁したっていうのか」

小さく睨むと、それに挑戦するかのようにタカノは目を閉じる。

「こうすれば、わかる。わかりやすいお前がいけない」

まぶたの裏側に相手の思考が写るとでも言いたいのだろうか。

「わかんないとかわかんとか、わけわかんねえよ」

「それはお前だ、」

自分のことをわからないふりをするな。

そしてまたコップを磨く。お陰で手のひらの皮が厚くなったらしい。地味な職業病だ。

あれから三日が経った。

答えを探そうと唸るスズメの周りで、タカノはコップを磨き続けている。

満足がいくと、その完璧な（あくまでタカノにとって）コップに、溶けそうな白ワインを入れてくれた。

結局タカノは人間に傾倒しているのだと思う。硝子のコップはど

こまでも道具なのだ。

「どうして彼女を殺したんだろう？」

タカノが言った。

おれの気持ちを讀むと、その証拠に声に出したがる。心配しくても、おれはタカノしか信じていないのに。

「殺すということは、存在を消すということだ。彼女がいなくなつて、なにを得られただろう」

なにを得たいと思つていたのだろう。

「やめろよ」

無理矢理その思考を止めた。

カウンターに突つ伏す。キュツキュ、は止まらない。

「スズメ」

なにもいらない。お前からは。

「白ワインは味方だ。どこにもいきやしねえよ、ほら」

慰めるな。知つていくくせに。

「欲望に忠実なことは、いいことだ」

おまえはそんなに人間が好きか。

「だけど、理性を失うのは愚かなことだ。そこでひとはひとでなくなるんだ」

おれは、ゆるされたいわけじゃない。

「なじられたっていいんだろ？なじりたいんだろ」

やめろつて言つてるんだ、その話は。

「最終手段を望んでいるのなら、そうすればいい。そこまで自分を追い詰めたのは、スズメ自身だろ」

そうだ。

「俺は止めない」

やさしくするな。

「仕方がない。おまえのことが大切なんだから」

「なら、」

助けるよ。

スズメは顔をあげた。磨き上げた硝子に映る自分が見えた。タカノが苦笑する。

「泣くくらいなら、正直になればいいのに」
タカノの掌が初めて、スズメの頭に触れた。
頑丈な熱。夏の余韻のような空間に、浮き上がるような熱さ。
おれの気持ちはなんて聞き分けがないんだ。

罪

ぼくがスズメと出逢ったのは、その夏の日の昼すぎ。

わかりません、を繰り返して小一時間、先生は一言「雀に教えてもらえ」と言った。

「スズメ？」

「そうだ。クラスにいるだろう」

若さが許す威厳をこめた声だ。ぼくに逆らう余地はなさそうだった。教師だつて、休暇中なのだ。

「ぼくは彼女に会ったことがありますか？」

初めて聞く名前だった。

「彼女じゃない。彼、だ。知らないのか？」

驚きで奇立ちを隠したように言う。その声は暗に、もうここにきて二ヶ月になるだろう、と言っていた。

「苗字は？」

「三木原」

黒板に書いて見せた。先生の右上がりの字で表されると、なるほど賢そうに思えてくる。

二人きりしかない教室に、先生のため息はちゃんと響く。

「雀は人に教えることが得意だから」

先生よりも？と訊こうとして、やめた。そんなはずはないからだ。ぶつぶつとミキハラスズメに関することを言いながら、荷物をまとめる。そう、それだけが事実。つまり先生は夏休みを夏休みらしく過ごさせてほしただけなのだろう。

そうこうしているうちに、ぼくは教室に一人取り残されていた。立ち上がり、左手の窓に近づく。この窓硝子の感じだけは、どこかの学校に行ってもちつとも変わらずにぼくを安心させる。

夏を受ける。

眼窩が熱くなる。

眠気に襲われた。ぼくが勉強ができないのは、この眼のせいだろうと思う。晴れた日の授業中に感じる瞳の心地よい熱に、眠気をもよおさないなんて不可能だ。

誰もいない校庭。ここに砂粒はいくつあるのだろう。それぞれが意思を持って存在していたら面白いのに、と思う。それは俗世そのものだろうな、と。人間の価値観だって、きっとこの砂粒の数でも足りないくらいに存在する。

昔からぼくは、正しいとか本当とかいう言葉は、どうしても胡散臭く思えてしまう。

だから学校は苦手だ。勉強も。

「ミキハラ、スズメ」

ぼくにそんな価値観の存在を求めない人だったらいいな、と思う。先生がぼくのノートに書き残していった彼の家の電話番号を見て、思った。

そうでなければぼくはそろそろ潔く、勉強するのを諦めるべきだ。

罪

月が昇ることが開始の合図。

強い夕陽が完全に陰るのを待つて、ぼくはいつも彼の部屋に入る。ミキハラスズメの家は、正しくはカゲロウといった。この小さな町で唯一のカフェテリアだ。サラが教えてくれた。

入り口に木彫りの看板を掲げてある。レトロで、けれど汚い感じはまったくない。雑草もきちんと刈り取られている。ただ窓硝子だけは、少しくすんでいる。

初めてここに電話をしたとき、ぼくは先生に騙されたのではないかと思った。「はい、カフェ・カゲロウ、マスターのタカノです」。教師という役職から解放されるために、嘘をついたのではないかし、そのマスターのタカノさんに話すとすぐに了解してもらえた。どうやらミキハラスズメは彼の店番を兼ねて居候をしているらしいのだ。

ぼくは周りに無関心すぎる。

サラには何度も言われてきたが、改めて実感した。町のカフェに居候している秀才で、容姿は端麗。数多いクラスメイトの中で、知らないでいられる方が難しい、スズメはそんな特徴的なでいらくありげな存在だ。

そして最近やっと、彼のことを少しずつだが知り始めている。

勉強の合間に挟まれるお互いの身の上話は、そのものの意味はなくとも、ぼくにとっては大変退屈しのぎになったし、それ以後の授業（と、ぼくは呼んでいる）もスムーズにできているような気がした。

ぼくは半分、彼自身に興味があつて、毎日欠かさずここを訪れている。

「お願いします」

親しき仲にも礼儀あり、というほど親しくなつたわけではないが、

ぼくは始めと終わりの挨拶だけは絶対に欠かさない。

「ああ」

その赤く薄い唇を綺麗に動かす挨拶は、それだけで特別な感じを受ける。

スズメがぼくに出した宿題を見せる。採点される。褒められて、注意されて、学び取る。

いつもそこから始まった。

目の前には、タカノさんが用意してくれたアイステイ。

赤みを帯びた液体に見とれるほどに、透き通った硝子のコップだ。コップに注がれたアイステイ、という題で展覧会に出品できそうなほどに、それは存在感を持っている。そしてそれにためらって口づけるのが、結構楽しみだったりする。

「グリ、明日のことなんだけど」

計算をしているぼくに、スズメが言った。

「ちよつと、時間を早くできないかな」

思わず手が止まった。いつもの曇りない声なのに、それはどこか強迫めいていた。

スズメの視線を右頬に感じる。睫毛の先まで捉えられている感覚。そしてそのひさしの下さえも。

「予定でもあるの？」

「おまえには関係ないだろ」

目の端で、アイステイの汗が滴る。言葉が出ないというよりは、口元の筋肉が強張っている感じた。

話の核心が別にあることを感じさせる空気。ぼくはこの空気を知っている。

こんなときはいつも、逃げ出すことばかり考える。

「理由が納得できないって？」

スズメの左手が、ぼくのシャーペンを取りあげた。

それを手の中でくるっと一回転させ、ぼくの右目のすぐ脇に突きつける。

肩が震え始めた。

「隠すなよ。この町のやつはもう全員が知ってるんだ」

「なにをだよ」

唾を飲む。咽喉が上下する。

椅子を引いて、スズメはぼくの方へ向き直った。肩にスズメの手のひらが触れる。

目と目が合う。スズメは瞳は、全てを跳ね返す鏡のような茶色だ。「おれは、おまえの目を見たい。おまえのことが知りたいんだ」目の前にある整った、作り物のような顔に、ぼくは言葉を塞がれた。

スズメの目は微塵も揺らがなかった。それはそのまま彼の真っ直ぐな気持ちを表していて、ぼくは逆に居た堪れない。

それだけは、人に頼まれてできるようなことではない。

「ぼくの目は、サラのものだから」

思ったよりもうんと、か細い声が出た。数少ない大切なことなのに、ぼくは強い主張すらできない。

ごめん、とは言わなかった。それはスズメを傷つけるような気がしたからだ。

気づいたら部屋を飛び出していた。

どうして。それだけを反芻してしまう。これもいつものことか。カフェの脇を駆けながら、タカノと視線がぶつかったよう気がした。

スズメと似た目をしていた。

すべてを吸い込むぼくの瞳とは、真逆だ。

罪

ぼくの目には、力がある。それは、みんなが言う「目でものを語る」だとか、そういう類の力ではない。

自分の眼が太陽に呼応するものだとか知ったときに、ただそれだけだろうか、と当然他の可能性も考えた。それが、この力だった。

「ぼくさつき、おかあさんをおこらしちゃった」

「グリくん、さつき私、あの子を引っぱたいちゃったのよ」

「彼女に内緒で、パン屋のカリンさんと食事に行っちゃってさ」

「タナシくんに告白されたんだけど、どうしても恋愛対称にはできなかつたから断っちゃったんだ」

みんな、いろいろな理由で、ぼくのところに来て来た。そのたびにぼくは、嫌な顔をせずに彼らに向き合う。

これはぼくが神様に与えられた使命。そう信じた。

彼らの肩に両手をかけて、その目をじっと見つめる。たったそれだけのこと。

ぼくに副作用のようなものは何もない。あるのは、倫理的なためらいだけ。

そのためらいさえも、ぼくは仕事だと思ってやり遂げる。現にこれだけで、ぼくとサラは生活してきたようなものだったから。

なにかを「してしまった」という罪悪感を帳消しにすること。

それが軽い罪悪感であればあるほどに、みんなはぼくを頼った。

ちつぽけなことを心に引っ掛けたまま生活するのは落ち着かないし、不快だからだ。逆に重たい罪悪感は、受け止めようとする人が多かった。まあぼくにとっては、どちらでも同じことだったのだけれど。

「お兄ちゃん、」

もう、やめたら？

しかしその一言で、ぼくはこの仕事をやめた。それはもう、あつさり。

田舎町の親戚が、ぼくたちの生活保護をしてくれることになったからだ。そして、サラがやめてほしいと言ったから。

そういえば、サラには一度も、この力を求められたことはない。ぼくはそれまでその事実気づかずだった。

する必要がないならいい方がいことだと、頭のどつかではわかっていたのかも知れない。

ぼくたちは逃げるようにそれまで住んでいたところを離れ、親戚のいるこの町へ来た。勿論ここではぼくの目のことを知るのはサラだけ。この先誰に教えるつもりもないし、この力を使うことはもうないと思う。

そう思っていた。

「おれは、おまえの目を見たい。」

その言葉は呪文のようにぼくの背中を締めつける。

どうして知っているの、

誰に聞いたの、

どこまで知っているの。

疑問が積みあがってぼくの中に螺旋を描く。鼓動が重たかった。見られたらいけないと思うのとは裏腹に、ぼくの目はしっかりと見開かれていた。

この力を使うことには誰の禁止もない。けれど、その焦りは、ぼくの中でこの事実があまり大きなタブーになっていたことを気づかせた。

この町にも太陽は昇る。

ぼくはどこに行っても逃れられない、それはくすぶり始めた恐怖のように。

悪いこと、の線引きはどこにあるのだろうか。ぼくはたびたび考えてきた。

本人の認識も然り、やはり世間的な倫理観だとか、あるいは法律

だとかがそれを左右するのだろう。

何かを間違えてしまったとき、後から間違いに気づいたときに、それを教訓として自分の中に刻みこむ際に使われるものは、やはり罪悪感あるいは後悔ではないのだろうか。

それを消せば、その間違いは、ただの出来事になる。たとえば、今日の朝はフレンチトーストを食べた、というくらい。そしてその程度の出来事は、自然と消去されていく。使い道のない記憶だからだ。

ぼくの力は、なんだろう。

ぼくはこれを使うことを、望んではない。けれど、無い方がいいとまでは思わない。

それはなぜか。

「お兄ちゃん、おかえり」

そうだ。これは、大切な人間から褒められるもの、綺麗といわれるものだからだ。

そしてぼくたちが、太陽の子供だという証明を手伝ってくれる。

ああ、眠くなる。夜は視界が曇る。

それでもぼくはまだ、スズメのことを知りたいと思っている。夜の思考はぼくの敵だ。

罪

学校に通うことは義務だ。そこにはなんの屁理屈もない。

距離感を測りかねる、青いだけの青い空を見上げた。視点が定まらない、雲ひとつない空を見ていると、思考すら溺れていきそうになる。今のおれの心はどうなっているんだろ。タカノに訊きたいと思った。

アスファルトの硬さが伝わってくる、薄い靴底にももう慣れきっている。今は居場所があるだけ、生命を維持する伝手があるだけで十分すぎる。

早く雨になればいい。

乾いた風に、手足が蒸発してしまいそうな暑さ。夏は攻撃的で、嫌いだ。おれを脅かす、負かそうという気すら感じる。

九月になったからといって、空はころっと秋の天候になってくれない。秋晴れ、なんて言葉があるが、それだって結局は九月まで侵食してしまった夏を正当化する言葉だろう。

湿気があった方が硝子は綺麗になる。

タカノもそう言っていた。

おれ自身、雨の日の方が気持ちが落ち着く。

まあその意味で、今日が決行に最適だといえなくもないのだけだ。

空の青さにぼうつとしながら、両手をぎゅっと握り締める。多分、失敗はしてあげられない。握りこぶしの中にじんわりと熱がこもる。

「はよ、スズメ」

「あ、」クラスメイトの声に、我に返る。「おはよう」

「あつついなあ。大体さ、夏休みつてのは暑さで勉強に集中できないから、って理由で設けられてるもんだろ？したら九月だってまだまだ夏休みにするべきだよなあ」

「そうだな。今日は快晴も、だるいだけだ」

「な！」

笑いあいながら、それでもこのクラスメイトの名前が思い出せなかった。

本気で不満をぶつけない、この愚痴という会話が、互いの親密度を深めるのに相応しいと思っているのがクラスメイトの大半だ。おれは何度、愚痴をこぼすことを強いられてきたか知れない。

なぜおれと親しくしたいのか、不思議で仕方がない。

でも、だからこそ、今の周囲からの愛情を手放せなかった。そのためにおれが抹消しなければいけないものも、把握している。

話しながらそのままクラスに着いた。一ヶ月ぶりの教室は、夏休みに入る前の暑さとなんら変わりはなく、むしろ生徒たちの日焼けした顔なんかが余計に暑苦しい。

夏休みの宿題を写しあっている者たち。おれに訊けば楽だということを知っていながらしないということに、彼らのもつおれへのイメージを教える。

この席からは、他のクラスの生徒たちが廊下を歩いていく様子がよく見える。人々に運ばれていく熱。窓を開けても意味のない、見えない淀みが居心地悪い。おまえもここに相応しい、汚い人間なのだ、といわれているような。

始業ベルぎりぎりに駆け込んだのは、グリだった。いつものように、白い肌に陰を落とす、つばの大きな帽子をかぶっている。青くて、ふにやふにやと波打つつばは、まさに波のようだとも思ふ。そしてなぜかグリには、それがとてもよく似合う。

あれ以来だ。

あれ以来話していない。顔も見えていないし、勿論、カゲロウにも来なかった。

窓際の一番後ろに滑り込んだグリは、その向こう側の空によく映える。その瞳が隠れているのが残念だと思ふ。

手に入れるために奪う。それは生きていく中で誰もが無意識に犯している犯罪なのだ。

おれは今日、それを実行するだけ。法律に触れてしまう形で、成し遂げるだけだ。

壊れないために。

壊す。

壊す。

置き去りにされた小さな雲のようなためらいを拭うため、おれは真っ直ぐに黒板を睨んだ。

その向こう側にある教室にいる彼女を、今射抜けたらどんなにラッキーだろう、と思う。そして今雨が降りだしたのなら、さらに。

罰

言い訳はしないよ。

耳元を擦っていくような音の間をぬって、スズメの真っ直ぐな声はぼくに突き刺さった。降り出した夕立のせいで聞こえなかったことにしてしまいたいと思った。

雨脚が強く、この傘ではとても間に合わない。しかし何の抵抗もなく雨に打たれる彼よりは随分とましなはずだ。整った顎の形をなぞるように水が滴っている。

あまりの驚きのせいで、憎悪が追いつかない。そのせいか、ぼくは雨に連れ去られそうなくらい濡れているスズメに、思わず魅了される。

「グリを探していた」

灰色の空から生まれたかのような薄暗い校舎を背に、スズメの赤い唇が浮き上がる。

「ずっとだ」

「ずっと？」

掠れた声で聞き返すのが精一杯だ。その細長い指先に自然と目がいつてしまう。

「グリのことを聞いたときに、それしかないと思った」

「なに、が」

「なのにおまえはその力を使っていないということも知っていた」

「なんで」

「そしておまえがあの子を大切にしていることを知った」

「サラは関係ない」

「だから殺したんだ」

泣きながら言った。頬にとめどなく流れる雨は、泣いているみたいに見えた。

瞬き一つしない。ずぶ濡れの彼を前にして、ぼくは罵倒して泣き

叫ぶ気持ちを削がれていく。

夢のなかにいるみたいだった。冷やされる足元、抵抗する体温。いつもなら不愉快に思える靴の中の感覚が、今はただの浮遊感だ。雨の元へと墜ちていけそう。

「なにを、望んで」

肩で息をする。雨の勢いと、濡れて滑る手元のせいで、傘を持っているのがやっとだ。

頭の軸が揺らぐような感覚に一瞬目を瞑る。

目蓋を持ち上げるとすぐ目の前にスズメの茶色の瞳があった。黒目の輪郭が若干琥珀色になっている。それが判るくらいの近さだ。

「壊すためだ。おれが壊れないために。それ以上でもそれ以下でもない」

傘の柄を握る力を失った。ぼくの唇は、雨に濡れる。スズメの前髪から滴る水滴が、ぼくの鎖骨を辿る。

「今を生きるためだ」

「スズメは……生きてる」

「だから、またおまえのところへ行く。これ以上抗う意味もないだろ。雨は絶対に止むんだ。そして太陽は絶対にやってくるんだよ」

「ぼくは、なにもしない」

「おれがさせに行く。おれのために」

手首をきつく握られる。互いの肌の間の水が温度を上げる。

「スズメはそんなことをするのか。みんなは知らないんじゃないのか」

「おれは、太陽とおまえにしか興味がないんだ」

そこに映るぼくの目は、なにも起こさない。手首が解放された。去っていくスズメの背中に、ぼくはなにもできずに佇む。意味を成さなくても殴りたい、という人間の気持ちを理解するのには、ぼくは臆病すぎた。感情の矛先を見つけられない。

雨は止まらない。これはどこまで強くなれるものなのだろう。

スズメは校庭の水溜りを避けようとせぜずに真っ直ぐに歩いてい

く。どちらが悪いか、分からないくらいに背筋が伸びている。いや、スズメが悪いといえるか？

きつと、悪い、悪くないの問題ではない。

ぼくはもつと怒るべきなのだろうか。実感がないから行動もできないのだろうか。

スズメの首を絞めることはできた。ぼくの目を抉ってしまうこともできた。

けれどぼくは、ただ立ちすくむ。

右斜め前にひっくり返った傘は、たつぷりと水を溜めている。その量で時間の経過を計ろうとして、すぐにやめた。

サラはいない。

それだけだ。雨が降ったのは、気まぐれでしかない。

罪

足音だけで、スズメのまとう空気まで読めるようになっていた。慣れは怖いものだと思う。人間の慣性は、どこまでも向上を許してしまう。厄介だ。

雲の厚さが気になる。ここも今は雲に取り込まれてしまったかのような、空気中に薄暗い水の粒が見えそうな、そしてその水滴に映った自分のつまらない顔が見えそうなくらいに湿っている。しかし、コップが奏でる高音が心地いい。マイナスは見事にプラスをつれてくる。

「早いな。夕飯はまだだぞ」

「知ってる」

「そうか」

「……知ってるくせに」

オレンジ色のライトが、カウンターにスズメの影を落とす。影までが湿っぽい。

「ふられたのか」

誤魔化すのも白々しいほどに、タカノはスズメの思うところを知りすぎる。それはあまりにも自然すぎて、まるで自分がスズメの双子の片割れかのような気持ちにすらなる。それが故意でないだけに、スズメは苛ついていて。そんな自分を宥めるために、言葉を飲み込む。

「黙るなよ。悪い、スズメを怒らす気はねえんだ」

わかっている。だから頭にくるのだ。もう堂々巡りだ。

「走ってつたの、見たからさ。それで、おまえの心も解ってるんだ、第三者が状況を把握するにはこれで十分すぎるだろ」

「足りてないよまだ」スズメが顔をあげる。「おれには、グリがわからない」

「確かに、その要素は足りてないな。でも必要でもないだろ」

「おれが知りたいんだ」

「訊けばいい」

「どうやってだよ。おれにはわからない」

「いつもみたいにさ。すました顔で脅しかけてやればいい」

「できない」

「憎らしいのに、か？」

「憎らしいのに、好きだからだ」

「そりゃ、愛だな」

「ちがう。おれはサラを好きになれない」

「じゃあ、恋だ。嫉妬だ。女々しいな、スズメ」

「おれはグリにそんなことは望んでない。生きたいだけだ、ふつうに。そのためにグリの力をもらいたただけだよ」

「おれにそれを説明すんのか、今更？」

「はあ、と重たいため息を吹きかけたコップを念入りに磨く。

「道具にはできない。愛することはできない。見つめあいたい。話したくない。矛盾が多すぎるぞ、スズメ。最初の目的ってやつを思い出してみろよ。初心に還る、ってな」

「シーリングファンは静かに回る。重たい空気をかき回して、いつもよりも気だるそうに。」

「スズメは黙り込んだ。これ以上御託を並べるのは、疲れるだけだ。タカノに何を言ったところで、結局一番大事なところは感覚として届いてしまっている。それ以上は、言い訳にしかない。」

「おれはおまえのことが大切なんだよ、」タカノは言った。「それだけなんだ。同情じゃねえぞ、無償の愛でもないけどな。ただおれは最低限としてスズメを守ろうとしてんだよ。こういう渦から。この窓の外に当たり前にある、灰色の渦巻きから。そいつらに食われないように、おれは見張ってるんだ」

「コップを磨いて？」

「まあ、そんなところだ」

タカノは白ワインを差し出した。

「雨のにおいがする、」スズメはそれを口に含んだ。

「我慢してくれ」

その甘みは、励ましではない。

タカノにスズメを応援することはできない。見放すことも絶対にできない。

間違っことを黙って許す。親が子を育てるのによく使う手段だ。

けれど、反省を促したりはしない。タカノはスズメの親ではないからだ。そして人を殺すということにきちんと、社会的な意味を持たせることのできる大人だからだ。

「おれはもう、戻れないよ」

黄色く透き通った液体は、スズメの頬を少し染める。部屋の中にまで雲があり、そこから今にも雷雨になりそうだった。

罰

硝子についた複数の傷が、格子のように視界を曇らせている。ここからはぼんやりとした色合いしか見ることができない。代わりに、声だけははっきりと聞きとれた。

カゲロウに行こう、と思ったのは、なにもスズメに復讐をしようだとか恨み言を連ねようだとか、見せつけに目の前で自害してやろうだとかそんな悲しい理由ではない。ぼくはこんな状況に追い込まれても、精神を狂わせることはなく（と、自分では思っている）、ただ、サラの最後を知る一人と近づいていたい、と思っただけだった。

連日の雨で飽和した大気は、土や木々の呼気が集まったかのような。それは体温すら含んでいる、生暖かいものだ。

ぼんやりと、鼠色の空を見つめる。大きな雲は本当に、鼠を何万匹も集めたかのように、今にも空から大量の鼠が降ってきそうだ。太陽は遠い。

ぼくは、すっかりしたかったのだ。

なにがあっても、後ろ向きになつてはいけない気がした。ぼくは、サラが何を望むだろうというつも考える。

もう二度と戻らないサラ。

手をかけたのはスズメかもしれない。だけどぼくがいなければ、スズメはサラに刃を向けることはなかったのだ。そう思えば、原因はぼくにある。ぼくの目にある。太陽にある。太陽を恨んだって、何も生まれはしない。

そこまで分かって、それでもスズメに言っておきたいこともあった。だから、ここへ来た。

ぼくがどれほどサラを愛しているか、それは言葉にしてぼく以外の誰かの胸の内に刻まれなければならない。それだけは、サラも望んでいると思う。

「どうして彼女を殺したんだろう？」

タカノさんの声だった。ぼくは混乱する。

中にはスズメとタカノさんがいる。さっき確認した。じゃあ、彼女というのは、サラのことだろうか。

でも、これは間違いなくタカノさんの声だ。

「殺すということは、存在を消すということだ。彼女がいなくなつて、なにを得られただろう」

もしかして、本当は、タカノさんがサラを殺したのか？

「やめろよ」今度はスズメが言った。

間。シーリングファンが空気をかき回す音。

「スズメ。白ワインは味方だ。どこにもいきやしねえよ、ほら」スズメは何も言わない。

「欲望に忠実なことは、いいことだ。……だけど、理性を失うのは愚かなことだ。そこでひとはひとでなくなるんだ。……なじられたっていいんだろ？なじられたいんだろう。……最終手段を望んでいるのなら、そうすればいい。そこまで自分を追い詰めたのは、スズメ自身だろ。俺は止めない。……仕方がない。おまえのことが大切なんだから」

「なら」

ぼくはスズメの声に全身で反応した。しかし、その先は聞き取れない。というか、声の響きすら感じとれない。この距離ならば、息遣いさえも分かりそうなもののに。筆談でもしているのだろうか。そんな、まさか。

「泣くくらいなら、正直になればいいのに」

タカノさんの、コップを磨く音が一瞬、止まった。

スズメが泣いている。サラを殺したことを、後悔して？罪の意識に押しつぶされて？

その姿を確認したいと強く思った。しかし、立ち上がって気づかれるのは嫌だ。今会うのなら、正面きつて対面するべきだと思った。こんなじめじめしているところに隠れているなんて、後ろめたいこ

とこの上ない。

罪

暗い路地にはどぶの臭いがつきもので、それは当たり前みたいにおれの足元に鼠を呼ぶ。

一番最初の記憶は、裸電球をバックライトにおれを見下ろす女の人。眉間の深い皺。消したくても消えない記憶は、曖昧な分だけとても残酷だ。よくて「出ていけ」、悪くて「死ねばいい」。そんなようなことを言われたという刃物による傷跡のような感覚だけが、心臓の近くに残っている。そしてそれがこんな夜をつれてくる。

目が覚めたら、太陽は昇り始める。いつもおれの方が少し早起きだ。

秋の朝は、さすががしすぎて恐ろしい。紙一重の体感温度。あとどれくらいこの衣服で生命を保てるのか、カウントダウンが始まっているのだ。

水を飲む。座り込んだまま、路地裏から眺める大通りに人が増え始めたら、十時の合図。できるだけ誰にも気づかれないように、目を伏せる。人は視線を感じるとそちらを見るようにできている生き物だからだ。存在感を消す。それでも鼠はやってくる。おれは今とても動物に近い。

夕暮れの町に、一日溜め込んだ体力を使いに出る。体がうまく動く回数を考えれば、勝負はわずかしかできない。それは毎日の、まさに命をかけた戦いだ。負ければ殴られ、血が出るかも知れない。最悪の場合は少年院に連れていかれる。いや、それ自体は構わない。その後で自宅に戻されてしまうのが一番の最悪の場合だ。それだけは絶対にごめんだった、言葉通り、死んだって帰りたくはない。だからつかまるわけにはいかない。おれは華麗とはいかなくとも、完全に、盗みきるしかなかった。存在感を消し、こそこそと動くのは慣れている。そうして何度も母親の目を盗んだからだ。しかし十回

に一回は見つかって、殴られて詰られた。小さい家ではそうそう逃げ回れない。だからおれは頭が割れるくらいに智恵と体力を振り絞って家を出た。

そうして隠れて動き回り、疲れ果てて夜になる。収穫を口に入れて、あとはひたすら眠る。

暗い夜はきらい。眩しい朝もきらい。賑やかな昼も、息をのむ夕方もきらい。

けれど死にたくはなかった。夜も朝も昼も夕方もない世界はなかった。おれはそこにいるしかなかった、じつと。背中をつたう汗と、それが冷えていくときにたつ鳥肌の感覚がとてもリアルで、おれはそのたびにひどく気分が悪くなった。

いつか終わりがくるだろうと思っていても、なかなか終わりはこない。

やつとのこと意識が消えかけていたときに触れた体温は今でもすぐに思い出せる。結局あるとき、おれは嬉しかったのだ。嬉しくて泣いてしまいそうで、泣くことを許されていることが嬉しかった。

目蓋がひどく重たくて、背中が地面にはりついてしまったみたい。動かなかった。けれどその地面のやわらかさを認識すると、驚きと焦りで体中の神経が一気に目覚めた。

跳ね上がるバネのように飛び起きた目の前には、とても線の細い人間が立っていた。瞬間、男か女か分からなかったが、「起きたか」の声でそれが男であることが分かった。

「……」

年季の入った木造住宅。見渡す限り、お世辞にもきれいと呼べるものはなにもない。

「疑うなら、しばらくのうち疑えばいい」

男はよれた生成りのシャツに、細い黒のスボンと、こげ茶色の革靴を履いている。そしてわき目もふらずに、布巾でガラスのコップを磨いていた。無精髭が生えていて、髪の毛は無造作にひとつにま

とめてある。こちらもお世辞にもきれいとはいえない人物だ。」「不潔な家と不潔な男で悪かったな」

「え？」

「でもそうだ、家に戻るよりはいいだろう。あの路地裏よりも数段空気はきれいだ。もちろんおまえの家よりも。まだおれが信用できるやつだかここがどんな場所だかわからないけれど、あそこよりもおまえに恐怖を与える場所はないだろう。だからここにいればいいさ。まあいきなりあんまり豪華なところに放り込まれても胡散臭いだろ？おれのことは不潔な救世主くらいに思ってくればいいんじゃないか。もちろん、同情したんだよおまえに。されるのがいやなのは承知だが、してしまったもんは仕方ないからまあ大目にみてやってくれ。ほら、ワインでも飲めよ」

そう言つて男は初めて顔をあげた。その眼にははつきりとおれが映っていた。いろいろなものが体に跳ね返ってくるみたいな、不思議な目だった。

おれは差し出された白ワインを飲む。のどの鳴らす音が、不気味なほどに大きかった。

おれが白ワインを飲み、再び眠りにつくまでの間もずっと男は話し続けた。それはおれの思っていることと奇妙にリンクしていて、とても変で、とても心地よい話だった。黙っていても伝わってしまう、黙っていても分かってくれる。この男がなにを考え、何の目的でおれをつれてきたのか、時間が経つにつれそんな疑問は薄らいでいった。そして男は一言も発さないおれに、「そう、まあその程度、適度に疑っておけばいいんだ」と言った。

他人に対等に扱われたり、あたたかい空気をもらった記憶が欠片もないおれにとって、これは現実だと信じるのにはいささか無理のある状況だったが、別にもうどうでもよかった。三秒後にこの男に殺されたって、おれはなにも悲しんだりはしない。やさしく扱われるという奇跡が起きたのならばラッキー、なぶられて殺されたとしてもそれは仕方がない。

ここは自分の家ではなく、外気に晒されもしない場所である。それだけですべてがよかった。言葉にできない安心感だった。

おれは男の低い声を聞きながら、初めておいしいと思ったアルコールの熱を借りて、深い眠りについた。このまま死ねたらいいのに、と思った。

罪

「消すことができる？本気で言ってるのか」

「本気がどうかはわからないが、おれは嘘はつかないさ」

「……」

「大きな事実ほど時間をかけて姿を見せるものだ」

様々な面倒臭い手続きを終え、ようやくスズメは町の中学へ通えることになった。

タカノは書類上ではスズメの親ということになった。つまり、スズメはタカノの養子になったのだ。周囲にしてみればそんな嘘はばれねなのだが、この町はそんなに、他人に真実を求めるようなところではない。二人の存在は静かに、小さなこの地に居場所を見つけていた。

学校に行くにあたって、スズメは一心不乱に勉強をした。朝起きて、夜寝るまで、周りが当たり前前にできていることを身につけるのに費やした。眠らないこともあった。

もう蔑まれるのはごめんだった。そういう要素は全力でつぶす。そうしないと、スズメ自身が不安で、人前に出られなかった。

お陰で学校に入ってから、群を抜いて成績がよかった。友達づきあいというものがよくわからずに、クラスでも黙っていることが多かったので、寡黙で真面目なひとだと思われ、そう扱われた。

そんな異質な転校生を、特別扱いこそすれ誰もいじめたりしなかったのは、スズメが美しかったからだろう。容姿の美しさに限らず、周りの目にはとても堂々とした強い者として映ったのだ。その日焼けを知らない肌と、女のように赤い唇は、じゃっかん軟弱に見えはしたものの、スズメの眸には、生死の山をひとつもふたつも越えたかのような（事実、そうなのだが）生命力があった。この町の者は、異質な者をいじめるが、それは同時に、弱い者に限った。勝てる戦

をして楽しむ。それがいじめる意義だからだ。

ここならば、「生きていける」。

しかしスズメは、実際にタカノとの生活が始まってからも精神的にはまだ、現実を受け入れきれてはいなかった。

満たされすぎていた。なにもかもが。

おれが立つその足元だけが、おれの居場所なのだと思って生きてきた。そして、その足元のわずかな場所ですらおこがましいのだと教えられてきた。どうして存在するのだ、どうして生きているのだ、と何度も詰問された。

しかし、ここではちがう。おれはどこにでも立てるのだ。約束も、了解も、なにもない。ただそこに生きて、どんな風にも立ち振る舞える。責められない言動は、きちんと、責められない。

「理不尽」が失せた生活。普通のひとならばかばかしくて話題になんててんでのぼらないようなささいなことが、スズメにとつては泣き叫びたくなるほど嬉しかった。その代わりにスズメは何度も、両手を広げて、陽光を受け止め、青い空に口づけをした。

生まれてきたことを母に責められた、あの記憶と罪悪感、消せはしない。けれど、いまここで、おれは生きていられる。

スズメはその感慨を少しずつ噛み砕き、——いつ裏切られてもいいように——少しずつ、少しずつ現実を受け入れていった。

逆に、先なんかどうでもよかったのだ。嘘だろうが本当だろうが、「いま」が満たされている。その「いま」に存在できているというだけで、いつでも死ぬると思った。生命にすがりつく気持ちが急速に薄れていた。それ以上にも望むことなどなかった。

それを、タカノに聞くまでは。

おまえはどうして、おれにそこまでしてくれるんだ。

「そうじゃなきゃ、つれてきたりなんかしねえさ。おれはそんなに無責任で向こう見ずに見えるか?……見えるかもな」

おれの気持ちかわかるから、同情しているだけなんじゃないのか。

「同情じゃあねえよ。これは……愛、だな」

「ふざけるな」

「本気だよ。大事な話だ」

「おれに、どうしろっていうんだよ」

「命令なんかしねえさ。おまえの人生だ。おまえに自由を教えようとしたのはおれだ」

「それはほんとうに、ほんとうに、感謝してるさ。だけどそれとこれとは、話がちがう。だって……そんなことを聞いたら、おれは動くしかないじゃないか」

「そんなことあない。おまえが動きたいと思っても、おまえが抑制かけりゃあいい」

タカノはこちらに一瞥もくれず、ただ磨かれるガラスの高い音だけが二人の間に響く。

強く強く握りこんだスズメの両手こぶしが、震えている。

どうしてこんなに泣き叫びたいのがわからなかった。

「おまえを……殴りたいわけじゃないのに」

「ああ。知ってるさ。それに、」

少し赤くなつた左の頬をそのままに、タカノが言った。

「いまのおまえにはそれしかできないってことも」

罰

この町のひとたちは、とても温かくて、とても穏やかで。しかしそれはどこか穏やかすぎて、むしろ冷静に見えた。現実味のもてない自分と、現実を慰めてくれる周囲とのギャップ。

秋の突き抜けるような青空の下、ぼくは余計に感傷的になんかなれない。

サラの葬儀は、思ったよりも早く終わった。この町では、死んだ者は町の教会に預けられる。神様が天国へつれていつてくれるのだという。

死因なんて問うものは一人もいなかった。この町には癒ししかない。神様は、サラを天国へつれていくだけで、スズメを地獄におとしたりはしない。

ぼくは手を合わせた。目は閉じなかった。泣きもしなかった。サラの大好きなぼくの眼の色を、隠したくはなかった。目の奥が熱かったのは、太陽のせいなのだ。ぼくは、泣かない。

泣くことがこわかった。

いまのぼくは塞き止められている。この晴れた空と、真っ直ぐな光に。

何かが翳ったら、すべてが崩れ落ちてしまうのだと思う。いまはまだ、ぼくはそれに抵抗しなきゃいけないと、無意識に感じていた。

だれもいない家に帰る気はしない。居場所なんてどこでもいい。なにが襲ってきて、なにを失っても構わない。

そんな気持ちで膝を折り、教会の裏のイチヨウの木に寄りかかる。太陽が赤い。もうじき、日が暮れる。おろした腰のすぐ横で、いくつもの銀杏が独特のにおいを放っている。不意に黒い小鳥が、それをひとつくわえて飛んでいった。

風はとても緩い。このまま黙っていれば、ぼくは数時間で大気に

溶けていけるような気がする。少しずつ、蝕まれていく、薄くなっていく自分。

とても眠たかった。不思議としあわせだった。

「……なんだ、」

笑みがもれる。

サラはちゃんと、ここにいるじゃないか。

ただ、眠ってしよう。

毎日、毎日、眠ってしよう。

目を閉じていよう。誰も求めずに、誰にも求められないように。そうしていればそのうちに、

ぼくはサラに会える。

スズメは、夜風にくるまれて静かに眠るグリを見下ろしていた。

同情を買うなんて、卑怯すぎやしないか。

何度も自分に問うた。タカノはきまって、返事をしなかった。

「おれは、ただ、」

教会が鐘を鳴らす。午後九時の合図。骨の内側を、重たい金属音が駆ける。

スズメは、自分が浄化されていくように感じた。相変わらず汚れているのだと、思った。

ただ？

……なにがしたかったんだろう。

ひとを殺したことについてこんなにも顧みたのは、生まれて初めてだった。

初めてすぎて、どこから手をつけていいのかわからなかった。自分がなにを望んでいるのかも。

けれどそれがなにであつたとしても、この行為は許されなかった

のではないかと、そんな思いが浮上するたびに、思考に蓋をする。
「おまえはただ、陽の光を受けて、おれの目を覗き込んでくれればいいんだ」

返事をしないグリの小さな頭を、冷たい両手で包み込んだ。

壊れないために、壊したはずなのに。

忘れていたんだ。おれは生まれ落ちたときからもう、壊れていたのだということ。

罰

裸足の足の裏側に、芝生がこそばゆく、心地いい。太陽の光は柔らかく、ぼくの目の奥にじんわりと熱を広げていった。体が軽い。遥か地平線まで、芝生が覆う。緑の大地も青い空も、視界に広がるすべての色を、光が飾っていた。

「お兄ちゃん」

風のような声だった。耳の入り口を撫でるような。

「……サラ！」

濃い緑色の絨毯に、白いワンピースがよく映える。呼ぶ唇は、ぼくのよく知ったピンク色だ。ぼくと同じ裸足の足首に、サラのお気に入り、貝殻のアンクレットが光っていた。

「サラ。会いたかった……」

数歩、歩み寄る。一步近づぐごとに、あがってゆくぼくの体温。瞳の奥が、じんじんと熱くなっていった。

サラは微笑んでいる。それはぼくの一番好きな、サラの表情だ。

「お兄ちゃん、きれいなオレンジ色」

サラが右手を伸ばす。ぼくの頬に触れた。

「サラに見せるためだよ。今日はとても、熱いんだ。さぞかし濃い色になっているんだろうな」

「うん。とっても、きれい」

「だって、ぼくは太陽の子どもだから」

「……どうしてサラは、この色を頂けなかったのかな。お兄ちゃんがこんなすてきな目をもったのだから、サラだって……」

「いいんだよ、これで」

「え？」

「サラは、きれいだから。かわいいから、いいんだよ。ぼく目の色なんかじゃとても敵わない」

「……上手ね、お兄ちゃん」

笑いながら、サラは優しく、その指先でぼくの目尻を撫でた。温かく、柔らかな指先。

首を傾け、少し位置の高いぼくの顔を見上げる、その仕草。いつものサラだ。緩やかな風が、サラの柔らかな髪をあそばせる。ぼくはこの存在を守るために、今までも、これから、なにをしてでも生きてゆくのだ。

「でもね」

「ん？」

サラの手が離れる。

「わたし、もう、お兄ちゃんとは一緒にいられないの」

ぼくを映すサラの大きな瞳が揺れた。同時に、ぼくの胸に、鈍い音が走った。

「え……？」

気づくと、サラはぼくから遠く離れていた。間近にあったその笑顔は、もうない。

「だって、わたし死んじやったから」

その白い体は、どんどん遠ざかってゆく。それなのにサラの高い声だけは、はつきりと聞こえた。

「お兄ちゃんは生きているから。わたしは、もう一緒にはいられないんだ」

「なん……、サラ！」

見えなくなる。遠くなる。慌てて走って、追いかければ追いかけるほど、サラは加速していくみたいにぼくから遠ざかっていく。

「ちよつと待って！待てよサラ！」

軽い体は、ぼくをいつになく俊足にしていた。ぼくは必死に大地を蹴る。景色は猛スピードで流れ、芝生の緑と空の青が混ざり始める。

「お願いだから、元気でいてね」

「……っ」

「もう、わたしのために、辛いお仕事はしないでね」

「サラ……！」

辛い、なんて……！サラのためなら、そんなことちつとも思わなかったのに！

「ありがとう……ばいばい、お兄ちゃん……」

サラが地平線の向こうに消えてゆく。ぼくは必死で走った。経験したことのない速さに、両足を自分のものとして感じる事ができなかった。足は勝手に動いていた。体が、本能がサラを追いかけていた。

ゴオオ、と、いきなり強い向かい風が吹いた。

体が押し返される……！

「……サラ！」

いやだ！こんな、こんなまま別れるのはいやだ……！

「サラ！サラ！……っ」

叫ぶのどに強い風が流れ込んできて、思わずむせた。足が止まる。胸が苦しい。

「……サラ……っ」

涙が流れた。とても熱い涙が。手のひらに落ちた雫は、太陽の光が溶け出したみたい、濃い、オレンジ色だった。

どうしてサラが死ななければいけなかったんだろう。

……答えは簡単だ。ぼくと一緒にいたからだ。こんな、災いを呼ぶ目をもったぼくなんかと一緒に。

両目から次々と涙が溢れるのに比例して、ぼくの体の力はどんどん抜けていった。柔らかい芝生に膝をつく。ぼくの重みで、地面が形を変えるのがわかった。そのまま、柔らかな大地に前のめりに倒れ込む。吸い込む空気は、あたたかく土臭い、生き物のおいしかった。

泣くなよ、ばか。

体の内側から、そう聞こえたような気がした。小さく、震えた声。ぼくは反射的に、ごめん、と呟いて、静かに瞳を閉じた。そしてもうこのまま二度と、開かなければいいと思った。

檻

天国は、こんな色をしていたのか。

そう思い、グリはとて久しぶりに何かを考えた気がした。生きているとか、死んでいるとかじゃなく、随分と長い間、自分という時間が深い黒ずんだ沼の奥深くに眠らされていたような感覚だった。そしてそれが、いま引き上げられ、目を開け、そこに映った景色の色に対して、不思議な感覚をおぼえていた。

さつきまで、サラを追いかけていた。それは確かだった。グリはゆつくりと、瞬きをする。

サラを追いかければ、そこは天国だ、という確信がグリにはあった。それはグリがいつのまにか、サラが死んだという事実を、きちんと飲み込めていたのだという証拠だった。

秋の木の実のような、暖色の丸い物体が、目の前にちらついている。それは小動物のようで、しかしかすかに発光していた。手を伸ばせば届きそうだが、グリの両腕は重く、頭も肩も足首も、影を縫い取られたように、動かすことができない。

薄い闇に、橙色の光る球体。ここが天国なら、これは魂というものののだろうか。橙色の火の玉。そんな感じもする。じゃあ、これは、サラの……？

「サラ……？」

「……起きたのか、」

驚いて、グリは左を向いた。日に焼けて色褪せた壁に向かって、誰かが立っている。細い背中。艶やかな髪が、光を受けて仄かに橙色を帯びていた。ちよろちよろ、と音がする。手元を見ると、金属製の洗面器のようなものと、白いタオルがあった。

「……スズメ？……うつ」

声を出すと、頭がガンガンと痛みだした。まるで、頭のなかに閉じ込められている誰かが、出してくれ、と頭蓋骨を拳で叩いている

かのような、激しい痛みだ。

「まだ息苦しいのか？ 咳は止まったみたいだけど」

「や……頭が痛い」

「まだ熱が下がってないのか」

スズメがグリの額に触れた。つい今しがた水に触れたその指は、適度に冷やされていてとても心地いい。

「ぼく……熱が？ ここは？」

辺りを見渡す。どうやら、誰かの部屋のようにだった。壁や天井に、所々雨漏りの跡がある。先程魂のようだと思ったのは、天井から吊るされた裸電球らしい。スズメがここにいるということは、ここはカゲロウだろうか。

「タカノの部屋だよ。……おまえ、教会の庭で寝てただろ。おれがたまたま見つけなかったら、もっとひどいことになってたぞ」

「教会……。ああ」

ああ、そうだ。

グリは、自分が死にたいと思っていたことを思い出した。死にたいというより、生きていたくなかった。いや、眠っていたかった、といった方が適切だ。それは思いつめた感情というよりは、もっと直感的なものだった。このまま眠って、何十年も眠ったままで、そしてそのうちに天へ召されれば、サラに会える。そう、思ったのだ。スズメが、グリに触れた手を、自分の額に当てる。小さく首をかしげた。

「そんなに熱くない。熱は、下がったみたいだ。その頭痛はたぶん……寝すぎだ。丸二日寝れば、そりゃあ頭も痛くなる」

スズメがにやりと笑った。赤い唇に、グリの目が止まる。あの雨の中で見たのと同じ、綺麗で真つ赤な弧。

「二日間も……」

布団のなかで、両手足を動かそうとするが、やはり重たい。確かに、二日間眠っていただけのことはあり、手足はとてもだるかった。唇も少し乾いている。

スズメが、「でもまあ、一応」と言って、絞ったタオルを額に載せてくれた。熱がひいているのならもうあまり関係ないかもしれないが、しかしその冷たさは頭の痛みを少しやわらげてくれる。とても気持ちよかった。

「ありがとう、スズメ」

小さく、グリは言った。

どうしてだろう、ずっと眠っていたと思ったのに。もう一度スズメに会えたことが、スズメがこうして看病してくれることが、こんなにも嬉しいだなんて。

どうしてだろう。

サラを殺したのは、スズメなのに。

サラがいなくなったことで、自分が壊れていくことすら気づかないほどに、悲嘆しているはずなのに。

「……おまえ、ばかか」

「え？」

突然の言葉に、グリは、うまく定まらない焦点を合わせた。橙色の光を背に、スズメがグリを見下ろしている。逆光で、表情がうまく読み取れない。

「ばかだろ」

そりゃあ、頭はよくはない。スズメに比べて自分の能力が劣るのは当然だ。というか、グリはスズメに勉強を教えてもらっていた立場なのだ。まあ、バカと言われても仕方がないが……

と、そう言うのが面倒なのと、多く話すと頭が痛むので、グリは、「まあ……」とだけ言った。

「肯定しちゃうのか。そういうのが、ばかだよな」

文字通り、ばかにするような口調でスズメが言った。グリは、その翳った瞳を見つめる。硝子のような、なにかもを跳ね返すような瞳。

「なに、いきなり……」

「おれが、」

スズメの顔が近づく。柳の樹のように、垂れたその前髪がグリの眼前に迫った。

「そんなにお人よしなわけないだろ。なのに……そんなにうれしそうに顔しやがって」

先程までの、嘲るような口調から、表情が消えた。スズメの淡々とした声が、グリの白い肌に、雫のように落ちてくる。それは染みとなって残りそうに思えた。スズメの声に侵食されていくような気がした。その眼球は鏡のようで、グリのぼうつとした顔を静かに映している。

「でも……スズメが助けられなかったら、ぼくは、もつとひどいことになっていたって……そう……」

「……どうしておれが、教会に行ったと思うんだ。サラの葬儀に出たわけでもないのに」

顔にかかるスズメの息は、温かくなどはなかった。人間の生ぬるい体温を、感じない。

「おれは、おれのために、おまえを“連れてきた”んだ。わざわざ、“捕まえ”に行ったんだ。おまえは助けられたんじゃない。“捕獲”されたんだ」

あの、雨の日と同じような口調。スズメが、なにを言いたいのかがうまく掴めない。高揚しているわけではなく、でも冷静というにはどこか脆い。ただ、なにかを隠している、それだけはなんとなく伝わった。冷淡というよりは、抑え込んでいるような話し方だった。

「……わかったか。覚悟しろよ。今日は曇っているけど……必ず太陽は顔を出す。そのときには、」

「サラを、」

グリは、弛緩した体から絞りだすように言った。

「殺した、のは……ほんとうに、きみ……なの？」

スズメが息をのむのがわかった。端正な目元で、一瞬、眉がきつく顰められた。

「きみは……」

「……だまれ！」

スズメの鼻がグリの顔にぶつかつた。同時にスズメの両手は、グリの両肩をきつく掴んだ。突然スズメの唇に口を覆われたグリは、妨げられた呼吸に咳き込みそうになり、胸が痛くなつた。視界が一瞬、ぐらつく。鼻腔から吸い込んだ空気は、スズメの髪のおいでいっぱいだった。思わず、目をぎゅつと閉じる。

「……ごほっ」

しばらくして、スズメが顔をあげた。離れたその唇は、相変わらず薄く、血のように赤い。両手の十本の指だけはまだ、しっかりとグリの細い両肩に食い込んでいた。

「おまえも、殺されたいのか」

「っ」

スズメの両指に力が入る。グリは思わず、身をすくめた。ベッドに肩の跡がつくくんではないかというくらい、強く押し付けられる。

「……おまえは、おれからは逃げられないんだ」

グリはじつと、その作り物のような瞳を見つめる。そこには、見知った自分よりも少し痩せた自分の顔があつた。確かに、スズメの長い睫毛の奥に、グリは捕らえられている。それは本物の檻のようだ。スズメが目を閉じれば、そのまま自分は永遠にそこから出られないのではないかと、そんな錯覚を覚えた。

右手にある小さな窓から、ひゅう、と風が漏れてくる音がする。

裸電球ひとつではちつとも足りない、薄暗い部屋に横たわり、グリは、もしかしてここはもうスズメの瞳のなかかなのではないかと思つた。こんなに重たい体では、出られそうにない、と思つた。永遠にと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8960a/>

太陽の罪と罰

2010年10月19日14時28分発行